法界明因果抄に五戒五常をあげて強調している。五戒は五常の道徳である。五戒は仏教戒律の基盤で、佐前後の御遺文の諸処に、特に開目抄（五三六）外典は仏教の初門といわれ、同抄（五五九）不妄語戒、主君耳入此法門与同罪事（八三三）に不殺生戒を説かれている。それ以外、四恩抄種々振舞抄（九六七）安国論二一九、開目抄（五四四）、（五三五）内典の孝経、父母恩の事は全遺文に四恩報謝の戒法を説かれている。五戒四恩報謝は御遺文の、法華経の示す道徳修身の戒法で、吾々人間の宗教である法華経御遺文の人倫道徳、過去の悪業を反省し懺悔し清浄ならしめる為めの戒法、実践的戒法である。姉崎正治博士の「新時代の宗教」に、宗教には道徳性、社会性の内容が無ければならぬというのも此点であると思う。

日蓮宗々義大綱の戒壇の説明には題目の三業受持を承けて「題目を受持する場所を戒壇」というてある。望月歓厚教授は戒壇とは所なりと解釈してある。場所のみなら「壇」だけで「戒」がない。戒法のない戒壇があるだろうか。鑑真、伝教の戒壇は二百五十戒、十重禁戒四十八軽戒の戒法ある戒壇ではないか。

以上三秘の序列に就て述べ、特に戒壇の内容を附加し、本尊戒壇題目の序列が日蓮聖人の御遺文に依る正当な序列である事を論じたのである。

尚、三大秘法抄には最初（一八六二）本尊戒壇題目の序列となっているが次には（一八六四）には本尊題目戒壇の序列になっている。本抄は真偽未定の御遺文である点を考慮して貰いたい。

身延山大学
複製本

法華経音義について

―本書を従来、日遠の著作とするのは誤り―

兜木正享

法華音義関係の書は、その数かなり多い。その内容を大別すると、(1)巻一から巻八まで各巻の次第にしたがって初出の文字をとりあげたもの、(2)篇画に分けたもの、(3)音別にしたものと、大略三通りに分けられるであろう。

このたび複製された法華音義は、第二の部類に属する書である。この書の跋に刊行の目的を記してつぎのようにいう。すなわち、法華音義は刊行書はあるが、快倫音義などは韻書を基にして作っているから、上智の導きではあっても初学者には向かない。そこで文字の同じたぐいを篇に分けて集め、また経中の同字別音をあげ、韻切などを教えて下愚、浅学を導くためにこの書を刊行するのであるというのである。

本書は、これまで本宗関係にあっては心性院日遠の作とされ、日遠の著作の一つにこれをかぞえている。その根拠はおそらく、日蓮宗章疏目録に、これを日遠の著作としてあげているのによったのであろう。章疏目録は何によってそうしたのかは詳でないが、江戸の書籍目録で初出とされている寛文目録に一巻の法華音義をあげている。それには作者名をのせていないが、元禄年間の目録には、法華大意二巻の日遠の著作についで「同音義一同作」とあるところから来たのではなかろうか。ただし、本書には文中に著者名を出さず、何人の著作であるかは知ることができない。

身延山大学複製本の法華音義は、日遠作という従来の説を信じて刊行されたことは棲神第四二号にいうところである。これは旧説のまま踏襲であって、これまで誰も日遠の著として疑っていないことでもあるから、それをとがめようというのではないが、本書は日遠の著作ではない。

なぜなれば、日遠には法華随音句その他の音義書があって、本宗における音義・音訓における指導的立場を築いているが、とくに内容的に直接に結び付きのある随音句である。ところが、随音句の説と、本書にいうところと相容れないところがあって、この書を日遠作とは認められないからである。その例をつぎにひく。

（法華音義）

二四オ　視シ父而已シ

二四オ　嬉ヤ戯ケ不已シ

二四オ　施シ功不已シ

（随音句）

上六オ　視シ父而已イ

上二二オ　嬉戯不已イ

上三八オ　施功ク不已イ

複製本音義に、譬喩品、法師品の三所にある「不已」はいずれも「シ」とよみ、日遠の随音句には、これを「イ」

とよむ。これに因んで、音義にはイ・コ・シ・キを「上著・下著・皆離・皆着」（二十四オ）とするが、随音句では昔イ・コ・シ・キハ上着・下着・皆離・皆着云大ニ可笑事也。夫、コトキ呉漢異也。又シトイトハ同字音ニ不同也。故文字、但二而已也（上十六ウ）

と述べ、「己ノ字ヲ有人シノ音ニヨムハ誤ナリ。辰巳ノ時ミノ音ナリ。ヤムトヨミ、及ビ語ノ終リニ置ク時ハ皆イノ音ナリ」（同上）といって、二字説を立てている。いっぱんには、これを三字として「ミ・シは上、ヤム・イはすでに中ばなり、オノレ・ツチノト、コ・キは下につく」などの詠でしられるように三字とするところについての説がこのように、両書の間に四字説と二字説とに分れているのである。このくいちがった内容の書が同一人の作であるとするのは、おかしい。さらに一例をあげれば、

（音義）　（随音句）

二三推　推落　下一推落　句解云タイ。然レトモ実ニハ、
ウ　ハオタイ　スイ・タイ俱ニ無二不可一（意取）

普門品偈の推落大火坑のところ音義ではスイラク、随音句では、スイラク・タイラクどちらでもよいという。前説を改めることはあろうが、そこには何かのことわりがあるはずである。それがないからには別人の説とみるべきであろう。また、この書には原本選択の手落ちがある。音義（二二ウ）の三音文字をあげたところに、覆刻時の落字がある。「楽・巳・切・推」のいずれもカナ付けの一音が彫り出されていない。これは本書は承応二年刊行本を覆せ彫りしたとき、彫り落したところである。そこには「ゲウ・シ・タウ・タイ」が落ちている。ここでは推に「タイ」の音をつけている。因に、切の字に「タウ」の音でよむところが法華経にあろうかという疑いがもたれる。これはないはずである。それではどうしてこれに三字音として「タウ」の一音をつけたのであろうかということになる。（このことは発表当日、室住先生からの質問）。

このことは、おそらくつぎのことに起因しているのではなかろうかと思われる。それは、藤原時代の音義書として知られる九条家本法華経音に「音訓或同或異形似字」という一項（二十四）があって、その中に「切・切・忉」をあげ

ている。第二字にセウの仮名をつけたのはセツの誤りかとも思うが、第三字目にタウの音をあげているところがある。写経文字は厳正な楷書ではなく、やや速筆なところがあるから立刀の篇が連って「異形似字」としてあげられているのであろう。このような類字が法華音のこのところにはたくさんあげられているから「或同或異」の中では、異形字としてあげたのを、のちに同字別音として法華音義にとりあげられたものであろうと推考する。

以上の例示で、このたびの法華音義は日遠上人の撰述書でないことが知られよう。また叙述のスタイルからみて日遠の他の著述と趣きがちがっていることも疑いがもたれる一つの理由である。

このたびの複製本は、寛文九年の覆刻本である。私がこれまで所見の範囲では、本書の原版である承応二年本に三版の別が刊記にそれを見ることができる。初版本には、尾題のすぐ下に一頁九行野にした末二行分に双廓二行の刊記があって、その第一行目は「承応二年癸巳立春仲旬」とあり、つぎに第二行目のところにつぎの三とおりの書がある。

(1) 崑山舘道可処士刊行
(2) 山屋治右衛門刊行
(3) 右衛門刊行

そして、右三書の版面をよく見ると、その鮮明度などから(1)(2)(3)の次第に刊行されたと判定ができる。刊行名をかえて、かなりたくさんの部数を刷ったものと見えて後者ほど摺り面に傷みがある。しかし、三版は別版ではなく刊記の末一行を入れかえてした同一板木のようである。

これに対して後版の寛文九年版にも二板がある。この二板は、別板であることが板面から見うけられ、いずれも覆せ刻りで板下を新しくしたものではない。刊記名も年号も全同であるが、木記に上欄の切り込みのある別板がある。そしてこの同年板の両版の版面を見ると、このたびの版面がもっとも拙劣で後版であろう。

最後に、本書の作者について推察がゆるされれば、承応二年の三板の中、后の(2)(3)二板の名は書店主の名であろう。はじめ(1)の崑山舘道可処士というのは誰であろうか。

これは書店主でもあり又はなく、本書の跋文にいう「予」にあたる本書の篇集者ではなかろうか。元来、法華の音義書の類書は多い。それらを習学して、篇画に分け（この方式先例がある）て初学便宜の指南書としたものではないであろうかとも考えられないであろうか。

宗宣言と教団

室住一妙

㊀ ただ今日蓮宗が全日本全世界人類に対し七〇〇年余りのその歴史的存在にかけて自体を宣言することばのこと。今の我々がたとい、よくはわからなくとも日蓮宗という宗団に属しているかぎり当然責任を負うべきことである。ほんとうの処、事、信仰に関する以上、法律道徳生命以上の重大重要な、いわば無限責任の信条である。

㊁ 今、委細のことはさておき、ただ掲げられた宗団のカンバン、日蓮宗という三字は、それ自体、立派に堂々と世界人類生類に、よびかけている、その人が、晩年のお手紙に「丈六のそとばを立てて、その面に南無妙法蓮華経と、七字を顕はしておわしませば、北風ふけば、南海のいろくづ（魚族）その風にあたりて、大海の苦をはなれ、東風きたれば、西山の鳥鹿、その風を身にふれ、畜生道をまぬがれて、トソツの内殿（ミロク菩薩の現在する天上界の宮殿）に生れん。いわんや、かのそとばに随喜をなし、身をふれ、眼に見まいらせ候人類をや」（中興書、一七一八）この道理をおしてくると、日蓮宗という言葉をあやつる人々や、そのイミを思える人まして、信じ行じている人々の功徳、どれほどか、全く想像を絶すると思う。

㊂ こころみに、日蓮という字をみる、ニチレンというひびきをきいただけでも、たれでも日本人は、もとより、セカイ中の人類、なんとなく、一種鮮烈な、ショックを受けるだろう。はてない無上の上からの、尊い光りに放射、地底から、感激の力が、わき出るだろう。